

現代アメリカ英語における ‘angry at/with/about/over’

‘Angry at/with/about/over’ in Contemporary American English

末 松 信 子

I

「～に腹を立てて、怒って」という意味を表す形容詞 *angry* は怒りの対象がなんであるかによって、それを導く前置詞が異なる。一般に物／事が対象である場合には *at*、人である場合には *with* が用いられると言われるが、実際には *at* の後に人がきたり、*with* の後に物／事がくることもある。更には *about* や *over* が使われることもある。小論では、大規模なアメリカ英語コーパスを利用して、前置詞とその目的語との間に特別な使い分けがあるのかどうか、その実態を観察したいと思う。そして、歴史的には変化が見られるのか、またイギリス英語との違いはあるのかも併せて見ることにしたい。

本調査のために利用した現代アメリカ英語のコーパスは、Brigham Young 大学の Mark Davies 教授が構築した 1990 年から 2017 年までの約 5 億 6 千万語からなる The Corpus of Contemporary American English (以下、COCA と略記)¹⁾ である。歴史的考察に使用したコーパスは、同じく Mark Davies 教授が構築した 1810 年から 2009 年までの約 4 億語からなる The Corpus of Historical American English (以下、COHA)²⁾ である。イギリス英語に関しては、アメリカ英語の COCA と COHA に対応するコーパスは存在しないので、1980 年代から 1993 年までの約 1 億語からなる British National Corpus (以下、BNC)³⁾ を利用する。ただし、これは上記 Mark Davies 教授が提供するインターフェイス (BYU-BNC) に基づいている。

II

本論に入る前に、*angry* に関する内外の辞書、語法書等の見解を見てみよう。

イギリス系の辞書では OALD (2015⁹⁾) が < *with/at* + 人 >, < *at/about/over* + 物／事 > の例文を挙げており、LDCE (2014⁶⁾) は *angry* が用いられる構文ごとの頻度を示す表を挙げ、前置詞を伴うものとしては < *angry with* + 人 >, < *angry about* + 物／事 >, < *angry at* + 物／事 > の順によく用いられることを示している。アメリカ系の辞書では *angry* に関して前置詞の用法に言及しているものは見られない。わが国のものでは『プログレッシブ英和中辞典』第 5 版 (2012) は「人に立腹 [憤慨]

¹⁾ COCA (<http://corpus.byu.edu/coca/>) は、1990 年から現代に到るまで、毎年、5 つのジャンル (Spoken, Fiction, Popular Magazines, Newspapers, Academic Journals) から 400 万語ずつ、合計 2 千万語を収録したもので、現在、5 億 6 千万語余りのコーパスである。

²⁾ COHA (<http://corpus.byu.edu/coha/>) は、COCA にほぼ準拠して構築された 1810 年から 2009 年に及ぶ約 4 億語のコーパスである。Fiction, Magazine, Newspaper, Non-fiction の 4 つのジャンルからなる。

³⁾ BNC (<http://corpus.byu.edu/bnc/>) は 1980 年代から 1993 年に及ぶ約 1 億語からなるイギリス英語のコーパスである。Spoken, Fiction, Magazine, Newspaper, Non-academic, Academic, Miscellaneous の 7 つのジャンルからなる。

した」時には *with* が用いられ、まれに、怒りが向けられる直接の対象を示す場合に *at* が用いられるとし、「(・・・のことで) 腹を立てた、怒った」時には *at, about, over* を用いるとする。『ウィズダム英和辞典』第3版(2013)では< *with, at* + 人>, < *at, about, with* + 物/事>とするが、ただし *about* は人も従えるとしている。『リーダーズ英和辞典』第3版(2012)は< *at, with* + 人>, < *at what sb says or does* >, < *about, over* + 物/事>としている。

語法書ではSwan (2016⁴⁾) は< *with*, 時折 *at* + 人>, < *about*, 時折 *at* + 物/事>とし、わが国の福井・北山 (2008) は *with* は人に用い、*at, about, over* は事に用いるが、*at* は人に用いられることもあるとしている。アメリカ系のWDEU (1989) は *angry* と共に用いられる前置詞は主に *with, at, about* であり、*with* は目的語が人である場合に最も頻繁に使われるとしている。ただし、3語とも人、物/事のいずれにも用いられるとしている。

辞書、語法書の述べることをまとめると、概略、人に関しては *with* が最も一般的であるが *at* や *about* が用いられることもあり、物/事に関しては *at, about*、時には *over, with* が用いられるということになるか。

先行研究としては田島 (1995, pp. 151–62) が1961年時の言語資料であるイギリス英語のLOBコーパスとアメリカ英語のBrownコーパス、及び1980年代後半以降の資料を中心としたイギリス英語のKBコーパス、アメリカ英語のKAコーパスをもとに、*angry* と前置詞の実態を調査している。⁴⁾ 当時のコーパスの規模は約100万語であり、それを反映して用例数は少ないが、前置詞の目的語が人である時はイギリス英語のLOBコーパスでは *with* が、アメリカ英語のBrownコーパスでは *with* に加えて *at* が用いられ、しかも *at* の方がよく使われるという傾向がうかがえると述べている。また物/事に関してはイギリス英語のKBコーパスおよびアメリカ英語のKAコーパスでは *at, with, about, over* と種々の前置詞が用いられるという。

歴史的に *angry* に続く前置詞の使用状況がどうであったのかについては、田島 (1995, pp. 152–53) に詳しく述べられている。それによれば、< *with* + 物/事>の用例が最も古く、既に14世紀末に起こり、次に< *with* + 人>が16世紀中頃から見られるという。そして *at* は人、物/事に関してほぼ同時に17世紀初めに見られるようになり、< *about* + 物/事>は18世紀後半から見られるが、< *about* + 人>の古い用例はどこにも記録されていないようであると述べている。

これらのことを踏まえて、現代アメリカ英語において *angry* の後に続く前置詞はどのような使用状況であるのか、イギリス英語とは違いがあるのか見ていこうと思う。

III

現代アメリカ英語の状況を観察する前に、まずアメリカ英語における歴史的変遷を見てみる。

⁴⁾ Brownコーパス (The Brown University Standard Corpus of Present-Day American English) は1961年度にアメリカで刊行された出版物から、LOBコーパス (The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus of British English) は1961年度に英国で刊行された出版物から抽出した総延べ語数約100万語の資料である (田島 1995, p. ix 参照)。KA (Konomi-American English) コーパス、KB(Konomi-British English) コーパスは、1980年代後半以降に刊行されたテキストから編纂されたそれぞれ100万語を越える資料である (田島 1995, p. xi 参照)。

3.1 歴史的に見たアメリカ英語の ‘angry at/with/about/over’

Mark Davies 教授が構築したアメリカ英語の歴史的コーパス COHA (1810–2009) を利用して、1810年以降のアメリカ英語における歴史的変遷を見てみよう。このコーパスは10年単位で検索データを提供してくれる。次の表 1.1 は、前置詞 at, with, about, over について、その目的語が人であるか、物／事であるかで分け、その頻度を10年毎に示したものである。

表 1.1 : COHA における ‘angry at/with/about/over’

	at		with		about		over		計
	人	物／事	人	物／事	人	物／事	人	物／事	
1810—	0	3	6	0	0	0	0	0	9
1820—	3	10	49	5	0	2	0	0	69
1830—	4	19	71	7	0	1	0	0	102
1840—	3	27	54	4	0	1	0	0	89
1850—	9	26	95	14	0	2	0	0	146
1860—	10	23	97	9	0	6	0	1	146
1870—	15	32	155	17	1	5	0	2	227
1880—	28	42	123	4	0	10	1	2	210
1890—	17	29	82	7	2	5	0	3	145
1900—	20	40	112	10	0	5	0	5	192
1910—	54	23	87	9	0	8	0	2	183
1920—	44	46	102	7	0	7	0	7	213
1930—	22	27	79	11	1	12	0	6	158
1940—	49	32	105	10	1	12	0	0	209
1950—	41	34	105	7	2	14	0	3	206
1960—	78	52	71	3	1	18	1	13	237
1970—	62	36	87	10	3	48	0	7	253
1980—	103	43	102	11	0	28	0	7	294
1990—	108	47	103	14	2	50	0	8	332
2000—	104	55	96	7	0	34	1	1	298
計	774	646	1781	166	13	268	3	67	3718

表 1.1 によると、1810年代は用例が少ないが、< at + 物／事 > , < with + 人 > が唯一の形式である。その後も with に関しては2000年代に至るまで人が後ろにくる例が圧倒的に多く、with の全1947例中1781例、つまり91.5%が人を従えている。一方、at については1810年代から1900年代までは物／事を従える例が6割以上であるが、1910年代には人を従える例が逆転し、1920年代、1930年代は再び物／事を従える例が若干優勢となるものの、1940年代以降は人を従える例が多くなっている。

前置詞 about と over については、表 1.1 によれば、about は1820年代から用例が見られ、2000年代に至るまで物／事が後ろにくる例が圧倒的であり、about の全281例中268例、つまり95.4%が物／事を従えている。over は1860年代から見られ、用例数こそ少ないが、2000年代まで物／事が後ろにくる例が通例である。具体的には全70例中67例、つまり95.7%が物／事を従えている。

対象が人である場合と物／事である場合の前置詞の頻度を、1800年代と1900年以降とで分けて見てみると次のようになる。

表 1.2: COHA における 'angry at/with/about/over' (対象別)

<人>	at	with	about	over	計
1800—1899	89 (10.8%)	732 (88.7%)	3 (0.4%)	1 (0.1%)	825 (100%)
1900—2009	685 (39.2%)	1049 (60.1%)	10 (0.6%)	2 (0.1%)	1746 (100%)
計	774 (30.1%)	1781 (69.3%)	13 (0.5%)	3 (0.1%)	2571 (100%)

<物／事>	at	with	about	over	計
1800—1899	211 (66.3%)	67 (21.1%)	32 (10.1%)	8 (2.5%)	318 (100%)
1900—2009	435 (52.5%)	99 (11.9%)	236 (28.5%)	59 (7.1%)	829 (100%)
計	646 (56.3%)	166 (14.5%)	268 (23.4%)	67 (5.8%)	1147 (100%)

表 1.2 によれば、怒りの対象が人の場合、with が全 2571 例中 1781 例と約 7 割を占め、次いで at が 774 例と 3 割を占めている。これは辞書、語法書などが述べてところと一致している。ただし、1800 年代と 1900 年以降で分けてみると 1800 年代には with が 825 例中 732 例、88.7% と圧倒的であったのが、1900 年以降になると 1746 例中 1049 例、60.1% と減少し、逆に at は 1800 年代には 825 例中 89 例、つまり 10.8% と 1 割程度にすぎなかったのが、1900 年以降には 1746 例中 685 例、つまり 39.2% と全体の 4 割を占めるに至っており、増加の傾向は明白である。about, over については人を伴う場合、1800 年代、1900 年以降いずれも、about は 0.5% 前後、over は 0.1% であり、稀である。以下に、前置詞別に、1800 年代と 1900 年以降の例をそれぞれ 1 例ずつ示す。(以下、引用文中の下線は筆者のものである。)

- (1) We are angry at those who disappoint our wish for the happiness of others. (1832 MAG)
- (2) Little Twig felt angry at himself for cutting his foot. (1998 FIC)
- (3) She is angry with those who are better off than herself. (1862 FIC)
- (4) She was angry with herself for revealing so much. (1997 FIC)
- (5) The whole town is angry about Barbara. (1894 FIC)
- (6) He's angry about his steward, who's robbed him and who's joined the King's party—he seems to think that you're responsible. (1954 FIC)
- (7) but we can not grow angry over those who stood in the deserts of Egypt and Syria to permit starvation and thirst and the torrid sun to expel sin from their flesh. (1880 MAG)
- (8) But why Boyd could get angry over Willard—well. (1960 FIC)

一方、怒りの対象が物／事の場合はどうか。1800 年代には全 318 例中 211 例、つまり 66.3% が at であり、最も多い。次いで with が 67 例、21.1%、about が 32 例、10.1%、over が 8 例、2.5% である。1900 年以降も at が全 829 例中 435 例、つまり 52.5% と比率的にはやや減少するが最も多い。しかし、

次に多いのは about で 236 例、28.5% となっており、with の 99 例、11.9% を凌いでいる。over は 59 例、7.1% と最も少ない。歴史的には at はやや減少し、about は増加傾向にあると言える。以下に、前置詞別に、1800 年代と 1900 年以降の例をそれぞれ 1 例ずつ示す。

- (9) But he was angry at his presumption. (1848 FIC)
- (10) The same survey also found that working Americans are angry at their government. (1996 MAG)
- (11) for he began to grow angry with his own weakness. (1871 FIC)
- (12) He was jealous of Lourdes, and he was angry with its high-riding hierarchy. (1984 FIC)
- (13) He was very angry about my marriage, the news of which had brought him from home. (1877 FIC)
- (14) She was angry about everything. (2004 FIC)
- (15) They were furiously angry over their losses, but their wise leader saw that he must give them a breathing-spell. (1882 FIC)
- (16) But how could he become angry over an idea? (1994 FIC)

以上見てきたように、19 世紀には、対象が人の場合 with が、対象が物／事の場合 at が最も一般的であるが、1900 年以降はそれぞれ両者ともにやや減少し、< at + 人 > , < about + 物／事 > の使用が増える傾向が見られる。

3.2 アメリカ英語とイギリス英語の比較

前置詞の使用に関してアメリカ英語とイギリス英語で違いがあるのだろうか。1980 年代から 1993 年までの約 1 億語からなるイギリス英語 BNC のデータと、それと比較するためアメリカ英語 COHA の 1980 年代と 1990 年代のデータを抽出してその生起状況を示したのが次の表である。

表 1.3 : COHA (1980–1999) と BNC (1980–1993) の比較

<人>	COHA	BNC	<物／事>	COHA	BNC
at	211 (50.5%)	24 (5.9%)	at	90 (43.3%)	142 (45.1%)
with	205 (49.0%)	374 (92.6%)	with	25 (12.0%)	45 (14.3%)
about	2 (0.5%)	6 (1.5%)	about	78 (37.5%)	103 (32.7%)
over	0 (0%)	0 (0%)	over	15 (7.2%)	25 (7.9%)
計	418 (100%)	404 (100%)	計	208 (100%)	315 (100%)

表 1.3 によれば、対象が人の場合、アメリカ英語では at が 418 例中 211 例、50.5%、with が 205 例、49.0% とほぼ同じ頻度である。一方、イギリス英語では with が 404 例中 374 例、92.6% と 9 割以上

を占め圧倒的に多い。at は 24 例、5.9% と稀である。

§2 でふれたように、田島 (1995, pp. 153–55) は 1961 年時のイギリス英語の LOB コーパスでは with のみ、アメリカ英語の Brown コーパスでは with に加えて at が用いられ、しかも at の方が好まれるという。また 1980 年代のイギリス英語の KB コーパスでも at は用いられず with のみが用いられ、アメリカ英語の KA コーパスでは at と with の両者が用いられるといった顕著な英米差が認められるという。田島 (1995) で用いられたコーパスの規模は小さく、少ない用例数で得られた結果であったが、今回の調査によっても、前置詞の目的語が人である場合、イギリス英語では with が一般的であるが、アメリカ英語では at も with と同じ位に好まれるという英米差が確かめられた。

また、田島 (1995, pp. 155–56) の調査では、前置詞の目的語が物／事である時は 1961 年時の LOB, Brown コーパスでは用例が見られないが、80 年代後半以降のイギリス英語の KB コーパスでは at 2 例、with, about, over 各 1 例の計 5 例、アメリカ英語の KA コーパスでは at 3 例、about 2 例、over 1 例の計 6 例となっており、物／事に関しては多様なコロケーションの広がりを見せているという。上の表 1.3 によれば、今回の調査においても、対象が物／事である場合にはアメリカ英語とイギリス英語共に種々の前置詞が用いられている。そして、いずれも at が最も多く、次いで about、with、over の順となっており、英米差は認められない。

COHA の例は既に §3.1 で挙げたので、以下、BNC から得られた用例を前置詞ごとに人を伴う場合と物／事を伴う場合についてそれぞれ 1 例ずつ示す。ただし、over については人を伴う例は見られないので、物／事を伴う例のみ挙げる。

(17) she was angry too at people who did not seem to appreciate what they had. (W_fict_prose)

(18) He studied a restaurant menu a few doors along feeling confused and angry at his confusion. (W_fict_prose)

(19) I couldn't help it, I was so angry with him. (S_conv)

(20) She's made me angry with her anger, and then turned it around so that I'm eaten up with guilt because she's been ill and I haven't noticed, and now she's taking the blame on herself and making me feel worse than ever. (W_fict_prose)

(21) Who said I was angry about men? I love them. (W_pop_lore)

(22) He was still angry about the coat. (W_fict_prose)

(23) I may say, that it seems unworthy of you that you should be too angry over this affair. (W_biography)

3.3 現代アメリカ英語における ‘angry at/with/about/over’

これまでアメリカ英語における歴史的変遷と、20 世紀後半におけるイギリス英語との違いを見てきたが、ここではもっと規模の大きい現代アメリカ英語コーパス COCA を使って 21 世紀初めの

現代アメリカ英語の状況を見てみたいと思う。COCA の 2000 年から 2015 年までを調査した結果が次の表である。

表 2 : COCA (2000–2015年) における ‘angry at/with/about/over’

<人>	COCA	<物／事>	COCA
at	789 (53.4%)	at	483 (37.1%)
with	674 (45.7%)	with	136 (10.5%)
about	13 (0.9%)	about	561 (43.1%)
over	0 (0%)	over	121 (9.3%)
計	1476 (100%)	計	1301 (100%)

上の表 2 によれば、前置詞の目的語が人である場合、2000 年から 2015 年の COCA では at が全 1476 例中 789 例、53.4% と最も多い。次いで with 674 例、45.7% となっている。§ 3.1 で述べたように、1800 年代は with が 88.7%、at が 10.8% であったのが、1900 年から 2009 年には with が 60.1%、at が 39.2% となり、< at + 人 > が増加する傾向が見られた。21 世紀初めにはそれがさらに進み、ついには < at + 人 > が < with + 人 > を逆転している。about は 1476 例中 13 例、0.9% であり人を伴うのは例外的である。over には人を伴う用例は見られない。以上のことから、人を伴う場合、前置詞は通常 at と with が用いられるが、at が優勢であり、今後も at の使用が一層増えるのではないかと推測される。以下、COCA から得られた用例を前置詞ごとに 1 例ずつ示す。

- (24) Hey, don't get angry at me because they left you. (2011 FIC)
- (25) Is there anyone, maybe a member of the crew, who might've been angry with your husband? (2013 FIC)
- (26) I was angry about the college stuff. (2015 FIC)

前置詞の目的語が物／事である場合、about が最も多く全 1301 例中 561 例、43.1% である。次いで at 483 例、37.1%、with 136 例、10.5%、over 121 例、9.3% となっている。§ 3.1 でみたように、1800 年から 2009 年までは at が最も多いが、1900 年以降 < about + 物／事 > の使用が増える傾向が見られた。21 世紀初めにはそれがさらに進み、at より多くなっている。with, over も 1 割程度用いられており、物／事を伴う場合、人を伴う場合に比べると種々の前置詞が用いられると言える。以下、COCA から得られた用例を前置詞ごとに 1 例ずつ示す。

- (27) Are you angry at something I said? (2011 FIC)
- (28) I understand people are angry with these attacks. (2013 SPOK)
- (29) I guessed that she was angry about something, though I couldn't say what. (2014 FIC)
- (30) He was very angry over that because he thought he was going to lose his home. (2014 SPOK)

IV

以上、angry に続く前置詞とその目的語との間に使い分けがあるかどうかについて、アメリカ英語を中心に、英米語の大規模コーパスを利用してその実状を見てきた。まとめると次のようになる。

アメリカ英語を歴史的に見ると、対象が人の場合、1800年代は with が一般的であったが、1900年以降次第にく at + 人 > の使用が増え、2000年以降 with を凌ぐまでになっている。イギリス英語では1900年代終わりでも依然 with が圧倒的であるのと比べると大きな違いと言える。英米共に about は稀に見られるが、over は極めて例外的である。

対象が物／事の場合には、アメリカ英語では1800年代は at が一般的であったが、1900年以降は < about + 物／事 > の使用が増え、2000年以降は at より多くなっている。 < with + 物／事 > は1800年代には at に次いで多かったが、次第にその頻度は減り、1900年以降その割合は1割程度となっている。 over は1800年代は2.5%に過ぎなかったが、1900年代には7.1%、2000年代は9.3%とその使用がやや増えている。物／事が対象の場合、人を対象とする場合に比べると多様なコロケーションの広がりが見られる。この点では1900年代終わりのイギリス英語も同時代のアメリカ英語と同じ傾向を示しており、英米差は認められない。

アメリカ英語において、今後も人が対象の場合 at の、物／事が対象の場合 about の使用が一般化するのか、イギリス英語ではどうなのか興味深いところではある。

付記

本稿作成にあたっては鹿児島大学男女共同参画研究支援員制度の助成を受け、ギュレメトブ・ニコライ (Gyulemetov Nikolay) (元鹿児島大学大学院人文社会科学研究所大学院生、現鹿児島大学共通教育センター講師)、曾山春樹 (鹿児島大学法文学部人文学科学生) 両氏に研究支援員として研究データの収集・整理の補助をしてもらった。お礼を申し上げたい。また執筆にあたり、ご助言賜った田島松二先生にも謝意を表します。

参考文献 (小論で言及したもののみ)

- LDCE (2014⁶) = *Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. London: Longman.
 OALD (2015⁹) = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 9th ed. London: Oxford University Press.
 OED = James A. H. Murray, et al. (eds.), *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1989 (1933¹).
 Swan, Michel. 2016. *Practical English Usage*. 4th ed. Oxford: Oxford University Press.
 WDEU = *Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, MA: Merriam-Webster, 1989.

『ウィズダム英和辞典』三省堂, 2013³.

田島松二 (編著). 1995. 『コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究』開文社出版.

福井慶一郎・北山長貴 (編). 2008. 『最新英語語法辞典』朝日出版社.

『プログレッシブ英和辞典』小学館, 2012⁵.

『リーダーズ英和辞典』研究社, 2012³.